

泉 孝英（編）

日本近現代医学人名事典 [1868-2011]

猪飼周平

一橋大学大学院教授・総合社会科学（比較医療史）

本書は、呼吸器内科を専門とする医学者が14年にわたり、明治期以降日本の近代医学・医療の発展に貢献した3,762名（物故者）の履歴を調べあげた成果である。評者のように、明治期以降の医業関係誌を参照する機会の多い者にとっては、このように便利かつ確度の高いレファレンスが完成したことは、大変喜ばしいことであり、そのありがたみは今後随所で感じられることになるであろう。編者の長年のご苦勞に感謝したい。

とはいえ、本書を単に事典として理解するとすれば書評の対象とする必要はないかもしれない。そこで以下では、本書を約800ページの読物と解してその意義を考えてみたい。

まず、本書に掲載されている人物の履歴を見ると、医師が大部分（3,383名）であり、またその大部分が大卒（3,027名）で占められている。戦前において大卒の医師免許の下付数はおよそ1万6,000名であり、その大部分が物故していると考えれば、ざっとみて大卒医師の2割弱の履歴を本書がカバーしていることになる。このように理解すると、本書はどのように読めるだろうか。

なにより、近代医学において戦前の大卒医が選抜されたエリートとしての役割を担っていたということである。後世の医学者（編者）の視点から見て、近代医学・医療の発展に貢献したと評価できる大卒医が、大卒医の少なくとも2割近くもいるというのは、いかに大卒医が実質を備えたエリート集団であったかを物語っている。

実際、掲載されているその履歴を読んでみると、大学教員を経ている者が多く、概して大変華々しいものであるといえる。これは、たとえば大正期に初版が刊行された『日本医籍録』（版によっては国立国会図書館の近代デジタルライブラリーで利用できる）と比較するとわかりやすい。

戦前を通じて、医師には、おおまかに言って、上から「大卒、医専卒、試験及第医、従来開業医」という4つの階層があった。『日本医籍録』の場合、試験及第医や従来開業医の掲載が多く、その経歴も、資格取得後比較的早く開業するのが一般的であった。そのような医師たちにとっては、開業地に地盤を形成し、市郡レベルの医師会などで社会的地位を

確保してゆくキャリアが成功のパターンであったといえよう。これに対して、本書に掲載されている大卒医たちは、基本的に大学の教員としてのキャリアを経ている者が多い。本書に掲載されている医専卒（医学校卒含む）が316名にとどまっていることから示唆されるように、医専を卒業して教員のキャリアを登った事例は少ない。ここから、戦前日本の医師4階層の中で隔絶した最上位階層として、また他の階層の医師たちとは異なった使命を帯びた存在として大卒医（少なくともその2割）があったことを読み取ることができるだろう。

もちろん、評者のように本書を読むというのは、おそらく一般的な利用法ではないだろう。ただ、読物として読み応えがあることがよい事典の条件の1つであるとするならば、少なくとも評者には、本書は単なる事典としての有用性を超えたよい事典であるといえる。

●A5/頁810/2012年/定価12,600円

（本体12,000円＋税5%）

[ISBN978-4-260-00589-0]

医学書院 刊